

はじめまして、レオです。

このレポートでは、
僕が大学生にしてなぜネットビジネスを始めたのか？

さらには大学院に進学したにも関わらず、
なぜ『就職』という選択肢を捨てて、
『ネットビジネス』という道に進んだのか？
ありのまま話していこうと思います。

ではでは、ここから始まりです。

僕が今やっていることは、
ライターさんを10名以上雇ってのサイト運営や、
ブログやYoutubeなど、自分のメディアから
情報発信をしている。

まさか大学生の自分が、
人を雇ってビジネスを動かすなんて考えもしなかった。
経営者の世界に入り込んでしまったのだ。

そもそも世の中の経営者と呼ばれる人間は、
特別な才能があったり、ビジネスセンス◎、人脈もハンパな
い、
このように極一部の限られた人間だと思っていた。

そんな僕だが、
ネットビジネスに出会ってからは、
次々と自分の中の価値観がぶっ壊れていったのである。

それでは、ここからは、
僕の人生をさかのぼって、幼少期のころからの話をしていこ
うと思う。

4人家族の次男として生まれた僕は、
両親と3つ歳の離れた兄がいて、いたってまともな家庭で育
った。

男兄弟として育った人ならわかると思うが、
幼少期は兄と二人、本当によく遊んでいた。

兄の興味のもったおもちゃ（ミニ四駆やビーダマン）など、
なんでも兄の真似をして遊んでいれば退屈しないのである。

この兄であるが、後に自分の大学受験や人生を考えた時、
一つの目標となる重要な人物であるため、そのことを覚えて
おいてほしい。

何不自由なく幼少期を過ごした僕であるが、
それは小学校にあがってからも何ら変わりなく続いた。

小学校1年になってすぐに、
K君というとても仲の良い友達ができる。

K君はかなり活発な子で、
僕の兄弟とK君の兄弟（兄と弟）を含めて、
毎日、日が暮れるまで遊んでいた。

たぶん当時同じ小学校で、
僕らほど遊びまわっていた子たちはいないだろう。（笑）
それくらい、活発に遊びまわっていた。
ある意味、健全な少年時代だったと思う。

自転車で何時間もかけて、
川、海、森にいったりスリリングな遊びをしていた。
そんな僕は、膝や肘はすり傷だらけの子供だった。

今すごく覚えているのは、
大雨の中、川で魚釣りをしたことがある。
雨で川の水量が増えると、普段は全然釣れないのに、やたら
魚が釣れるのだ。
ヤマメやサクラマスだろうか。たしかそんな名前の魚だったが・・・
大雨の中、橋の下で釣った魚を焼いて、みんなで分け合って
食べた。

まるでサバイバルだが、あの状況で食う魚は最高にうまかった。

ちなみにこの時は、たまたまK君のお母さんが通りかかって、「大雨の中、川に近づくななんて馬鹿じゃないか！」とめっちゃくちゃ怒られて終わった。(笑)

このように活発に遊んでいた子供だったから、小学校の中でも、すぐに僕とK君を中心に友達の輪が広がっていった。

小学校3年になったころには、僕は、K君や他の仲のいいメンバーと共に学校のサッカー少年団に入団した。運動神経のいい奴らはだいたい僕らのメンバーにいたので、後に僕らは地元の地区大会では何度も優勝するチームとなった。

その中でも僕は、チームの中心選手として活躍して、トレセン(地区選抜)に選ばれるなど、サッカーでそれなりの成績を残していった。

サッカーを始めてからは、
放課後は学校のグラウンドでボールを追っかけていたし、
相変わらず外で遊びまくっていた。

また意外かもしれないが、僕は勉強もクラスで上の方だった。

よく周りからは、
「サッカーも上手くて、頭も良い子」と言われて、
自分は特別な人間なのだと本気で思っていた。

しかし、僕は少年時代からずっと、
心の中は弱い人間であることは間違いない。

おそらく誰の小学校時代でも、
クラスに一人は、勉強もスポーツもできる人気者がいたのでは
ないだろうか。

たぶんその人気者は、
周りから見れば、悩み事なんて何もない、自信満々な人間に
見えたと思う。

僕も周りから見ればその人気者であるはずだが、実際は違う。

まず僕は極度の人見知りだった。
特に大人と話すのは大の苦手だ。

そして人前で話すのが何より下手くそだった。
僕の小学校では、日直がみんなの前に出て
『朝の会』『帰りの会』を進行するという制度があったのだ
が、
みんなの前で話すというだけで、モジモジして顔が赤くなっ
てしまった。

さらに最悪なのが、
「顔赤くなってー」という野次が飛んでくることだ。
そう言われるとさらに意識して顔がどんどん赤くなる。

勉強もスポーツもできる人気者の自分が、
こんなところで顔を赤らめて恥を晒しているのだから、
けっして自分は完璧な人間ではないということである。

ちなみにこのような経験は、
小学校だけでなく、中学、高校でも幾度となく経験している。

自分で言うのも何だが、スペックは常に周りより高いと思い
込んでいた。

足りないのは、自分に対する自信。

どうしても自分の殻を壊すことだけはできなかった。

話を戻そう。

小学校ではサッカーでそれなりの活躍をしていたため、
中学は地元の公立中学校に進学すると同時に、
部活に入らずにクラブチームに所属することにした。

クラブチームに入るには、セレクション（入団試験）があっ

だが、

トレセンに選ばれるくらいの実績はあったので、難なく合格することができた。

さてここからは中学校時代の話である。

中学時代、僕はさらにも増して、

自分自身の『殻』に苦しめられることになる。

まずサッカーのクラブチームの話であるが、

地元でもかなりの強豪チームであったため、上手い奴らがうじゃうじゃ集まっている。

チームメイト皆が、

小学校では各チームのエースであり、リーダー格の奴らだったから、

当然技術も高いし、我も強いのだ。

もちろん僕も技術では負けていなかったし、

サッカーでは対等に渡り合うことができた。

しかし先ほども述べたように、僕は心の弱い人間である。

周りがこうして、自分と同じレベルで、
且つ、私の強い人間の集まる環境に放り出されると、
無意識に自分の中にバリアーを張っていた。

人見知りという性格も手伝って、
僕はチームの中で『おとなしい人間』になってしまった。

『おとなしい人間』が、サッカーのチームの中で活躍するのは難しい。

殻に閉じこまったままの僕は、
練習では、ミスをしたないように、ミスをしたないように・・・と
恐れてやっていたし、
コーチの視線ばかりを気にしていたので、プレーにも消極性が現れていただろう。

好きでやっていたはずのサッカーが、
いつしか練習に行くのが憂鬱なくらい、重圧を感じてしまっ
ていた。

結局僕は中学3年間で、一度もレギュラーになることはでき
なかった。
これが僕の人生で初めての挫折だと思う。

少なくともこれまでは、勉強もスポーツも誰にも負けてこな
かったので、
「自分は優れた人間だ」と信じて生きてきた。

しかし周りのレベルが上がると、
僕は自分の殻に閉じこもってしまい、何もできなかった。

ここで、
「当時の自分はめちゃくちゃ悔しかった・・・」と書きたいと
ころだが、

果たしてほんとうに悔しかっただろうか？

たしかにレギュラーになれないのは悔しかった。
けど僕は、最後の大会が終わる前にチームをやめたのだが、
当時の心境では、「もうあの重圧に耐えなくていいんだ」と
いう、
厳しい環境から解放された安心感の方が大きかったと思う。

自分は本当に殻に閉じこもった弱い人間だ。

正直、ここまで自分の弱さを赤裸々に書くのは、
かなりの抵抗があるのだが、このまま続ける。

サッカーのことは書いた。

中学校生活は、相変わらず人見知りではあったが、
勉強もスポーツも人並み以上だったし、友達に困ることはな
かった。

たぶん精神年齢は小学校と変わっていないと思う。(笑)
相変わらず、アウトドアで色々なところに行き、遊びまくった。

そんなこんなで、サッカーの挫折を除いては、
順調に中学校生活を送っていた。

一つだけ忘れられない出来事がある。
それは音楽のテストの時間だ。

僕の中学では、音楽では歌のテストがあり、
一人ひとり前に出て、みんなの前で歌わなければならないの
だ。

正直これは苦行でしかない。
まず僕はこれまで合唱の時間に声を出して歌ったことは一
度もない。
生まれてこの方、口パクだけで乗り越えてきた。

ただでさえ人前に出ることが苦手なのに、
歌を歌うなんてマジで無理だった。

音楽のテストが行われる1か月くらい前から、
その日のことを考えると憂鬱で死にたくなかった。
今思えばちっぽけな悩みだが、当時の僕からすれば大問題で
ある。

そして音楽の試験当日。

僕は口パクをした。

普段声を出して歌ったことがないから、
どんなに頑張っても、出すことができなかった・・・

結局、自分一人しか歌うはずもないテストなのに、

僕は最初から最後まで口パクだった。
要するに、ただの沈黙だ。伴奏だけ。

周りの人は、僕のことを滑稽だと思っただろう。
それでも、僕の出番が終わったときはホッとした。

面白いことに、僕がこのように口パクをしたことで、
続く何人かの生徒も、口パクだけして歌わない奴がでてきた。

正直これにはかなり救われた。
これで僕のことだけ変な目で見るとはなくなるだろう。

音楽の成績は悪かったが、
他の教科は、テスト前にちょっと勉強すれば簡単に良い成績
を取ることができたので、
高校は偏差値 60 くらいの地元ではそれなりの公立高校に進
むことになる。

こうして高校へと進学したのであるが、
僕は少なからず自分は優秀な人間だと思っていたし、
プライドは相当高いものがあっただろう。

それと同時に、
人見知りで、他人の前で感情を出すのは苦手だったから、
歌のテストなどがあれば、それは僕にとって大事件であった。

そんな僕は将来について、
漠然と「自分は勉強もスポーツもできる優れた人間だ。いい
大学に入って、年収 1000 万円を超えるような会社で働き、
勝ち組として人生を生きる」という気持ちは常に持っていた。

中学時代、サッカーのレギュラーにはなれなかったが、
「俺はあいつらと違って勉強もできるから、結局最後に笑う
のは自分だ」と納得していた。

今思えば、実にしょっぱい人間だ。
そもそもいい大学に入るなんて人生においてそれほど重要

ではないし、
サラリーマンとしての収入には限界もある。

まあ、そんなことは当時の自分に知る由はないので、
高校時代は、一流大学に合格することが正義だと信じていた。

そして自分は将来、勝ち組になることしか考えていなかった
ので、
一流大学に合格しないことは、人生の破滅を意味していた。

何が言いたいかっていうと、この自尊心から、
高校に入学してからは、ずーっと、なんとなーく、
頭の片隅に『大学受験』という重たい課題がのしかかっていた
ということである。

『一流大学』 = 『人生の勝ち組』
という考え方だったから、
当然、大学受験は乗り越えなければいけない壁だ。

もちろん常にそればかり考えていた訳ではないが・・・

高1の時は、「いずれ本気で受験勉強するんだよな～」

高2の時は、「あと1年後には、一流大学目指して勉強して
るんだよな～」

という程度に悩んでいた。

ちなみに高3になるまで勉強は全くしなかった。

とまあ、こんな感じで、

『勝ち組になるための大学受験』という不安要素はありなが
らも、

高校生活は今まで同様、充実した日々を過ごしていた。

サッカーは高校でも続けることにした。

何の変哲もない公立高校のサッカー部であるから、

けっしてレベルは高くない。

小・中とそれなりのレベルでサッカーをしてきたため、僕はすぐに、上の学年の試合に出るようになり、高3で部活を引退するまで、ずっとチームの中心として活躍することができた。

しかし忘れてはいけない。
僕はこのように、周りが自分よりレベルの低い環境なら輝くことができるが、一転して、ハイレベルな環境、激しい競争の中に入り込めば、自分の殻を破れない僕は、すぐに潰されてしまうだろう。

中学時代の挫折により、この自分の弱さは薄々自覚していた。それと同時に「ポテンシャルは他の人間より高い」という自信も捨ててはいなかった。

こういった感じで、サッカー一部では試合に出れていたし、怒られない程度に髪を染めたり、パーマをかけたりして少しチャラけていたから、

傍から見れば人生が充実したように見えてたかもしれない。

相変わらず人前で話すのが苦手というコンプレックスはあったが、
それでも奇跡的に彼女ができたこともあった。

そんな高校生活で、あるちょっとした事件があった。

高3になってすぐ、春に行われた三者面談である。

いよいよ高3、受験生であるから、
担任、親、自分とで進路について本気で見据える時間だ。

この時、僕の成績は、
学年320人中で、300番台という最下層にいた。

さすがに2年間まったく勉強してこなかった自分が、
いい成績を取れるほど高校の勉強は甘くない。

それでも僕は、一流大学に合格する未来しか想像していなかつた。

プライドの高い自分が、当時の自分の価値観で言うところの
三流・四流の〇〇工業大学などに入学するのは、ありえない
話だったのである。

しかし、僕がいくらこのような野望を抱いていようとも、
周りから見れば、成績最下層の僕が一流大学に合格するとい
うのは夢のまた夢である。

担任は、今からでも頑張って勉強して、
〇〇工業大学（偏差値 50 以下）に合格できればいい方だと
考えていたし、
親は何とか国立大学に入ってくれれば・・・という感じだった。

僕の通っていた高校のレベルを説明すると、
進学校ではあったものの、全国的にみれば決して高いレベル
ではない。

だいたい毎年、地域でトップの大学（旧帝大の一つ）に、
現役で10名くらい合格すればよし。というレベルだ。

東大、京大クラスの合格者はまず出ないと言っていい。

ちなみに僕が一流大学と呼んでいるのは、
地域でトップの大学（旧帝大）レベルの大学のことである。

この三者面談で僕は少しショックを受けた。

すでに誰も僕に期待はしていなかったからだ。
「お前はもう手遅れだ」と大人たちは考えていた。

でも僕はまだ本気を出していない。
スタートラインにすら立っていないのである。

それなのにもう無理だと決めつけるのは早すぎではないだろうか。
プライドの高い僕にとって、この状況にはメラメラと沸き立つものがあつた。

ただこの状況で、
「自分は一流大学を目指している」と言えるほどの自信はなかったのも事実である。

実は僕が一流大学にこだわる理由はもう一つあって、
それは兄の存在だ。

兄は3つ歳上で、
僕と同じ高校の卒業生である。

そして兄は、一流大学に現役合格した。
要するに学校ではトップレベルの成績だったということだ。

兄は、僕と違い、
高1高2の頃から、まじめに学年のトップの方の成績を維持
していた。

当然のごとく、先生方の期待を一身に受け、
見事そのまま一流大学合格の切符を手にした。

一流大学に合格するほとんどの人は、
コツコツと良い成績をキープしてきた、兄のような模範生で
ある。

僕はその対照というわけだ。

三者面談を終え、部活も高3の6月には引退する時期となり、
いよいよ僕はここから本気で受験モードに入った。

ちなみに僕の勉強法は、ほとんどペンを持たない。
教科書、参考書、問題集を何度も読みまくる。
理解できるまで読みまくる。

だから僕の勉強場所は、自分の部屋のベッドである。(笑)
椅子に座るのは疲れるので、ほとんどベッドから動かずに楽
な姿勢で勉強した。

もちろん細かい勉強法は色々あるが、長くなるのでここでは
書かない。
興味のある方は連絡してほしい。

そして結果から言うと、成績はメキメキと伸びた。
11月くらいには、僕は『一流大学を目指す組』みたいな扱い
になっていた。
模試の成績は学年でもトップクラスだった。

半年前までは誰も期待していなかったのに、
結果が出た途端、周りは都合よく僕に期待するようになった。

そしてこの勢いは止まることなく、
僕はついに念願の一流大学の現役合格を手にした。

あっさり書いたけど、
受験勉強はしんどかったし、サボらず毎日勉強したから合格
できた。

正直、僕は安心した。
勝ち組になりたいという意識が人一倍強かった僕にとって、
一流大学合格は、それを一気に現実のものに近づけたと思っ
たからだ。

このように、
『学歴は正義、大企業に就職することが勝ち組になること』
と考えていた僕が、
価値観を崩壊させ、学歴も、就職の道さえも捨てたのが、次
の大学時代の話である。

また、高校では僕の逆転合格劇は有名なものとなっていて、このときの成功体験は、後にビジネスをする上でも役立っている。

晴れて一流大学に入学した僕は、気持ち的にはゆとりを持って生活をしていた。

もともと勉強をまじめにやってきた人間ではないから、授業はくそつまらなかったけど、単位さえ取れば OK だから、自分にとって大学は居心地がよかった。

あとはバイトもたくさんしたし、少ないながら気の許せる友達もいた。

しかしマジで何の生産性もない生活だったのは事実である。時間は莫大にあったのだから、この時間を何か一つのこと集中していれば、かなり大きなものを得ることができただろう。

まあそれでも僕はこの生活に満足していた。
なぜなら、一流大学という学歴さえあれば、
あとはそれなりの大企業に入って、勝ち組の道は約束されて
いると思ったからだ。

とりあえず僕は理系なので、
大学卒業後も、大学院までは進学して、就職しようというの
はイメージしていた。

そんな僕に、大学4年の夏、
人生の転機が訪れる。

ある日、僕は自宅でゴロゴロとスマホをいじっていたとき、
『アフィリエイト』という言葉を見つけた。

どうやら、アフィリエイトとは、
ネットビジネスの一種らしい。

『ネットでお金を稼ぐ』という言葉に興味を引かれた僕は、アフィリエイトについて検索して調べまくった。

そしてわかったことは、

- ・アフィリエイトでは月 100 万以上稼ぐことができる
- ・一度稼ぐ仕組みさえ出来てしまえば、寝ていても不労収入が入ってくる
- ・リスク 0 で、副業など片手間で始められる

ということだった。

正直、胡散臭いという気持ちになかったわけではないが、アフィリエイトというビジネスモデルを考えてみれば、詐欺とかではないなと思った。

世の中でもそれなりに知名度があるみたいだし、副業でやって、実際にお小遣い程度で稼いでいる人がいるということは、別にそんな怪しいものではないなと思った。

ただ果たして、自分がそれを実践して、
本当に稼げるようになるかは別の話だと思ったが・・・

それでも『勝ち組』になることにこだわっていた僕は、
月収 100 万円、不労収入という言葉に魅了され、
アフィリエイトをやってみようという決意を固めていった。

せっかくやる気が出たんだけど、ちょっとタイミングが悪く
て、
大学 4 年の時期は、卒論研究が本格化して、
なかなかネットビジネスに時間をかけることができなかつ
た。

結果として大学 4 年では、
情報をインプットする時間に費やすことになる。

実際に作業するのは、大学院に進んでからである。

そして大学4年のある日、
僕はある運命的な出会いを果たすことになる。

その日は、夏休み中で、
昼夜逆転していた僕は、深夜3時だというのに、
目はパッチリと覚めていて、だらだらとネットサーフィン
していた。

そしてふと、ある人物が目にとまった。
その人物は、23歳にして月収500万円を稼いでいるという
のだ。

彼は、ブログやYoutubeでネットビジネスに関連する情報を
発信していたので、
僕はとりあえず彼の動画を視聴することにした、

彼の発する言葉には説得力があったし、
『クリックするだけで 100 万円稼げます』というような、
甘い言葉で消費者を引き寄せるような輩とは明らかに違っ
た。

そして彼は、衝撃的な言葉を発した。

「サラリーマンとして会社に雇われて働くことに、真の自由
はない」

この言葉は僕にとって受け入れがたい事実だった。

だって僕が 22 年間生きてきた意味は、
いい会社に入って、人並み以上の給料をもらう勝ち組になる
こと。
そのために受験勉強もしたし、難関大学（旧帝大）に合格す
ることもできた。

はっきりいってこのとき僕は、

「いやいやいや、この人はいったい何を言ってるんだ。年収1000万越えのサラリーマンが勝ち組じゃないわけないだろう！冗談も大概にしてくれ」とおもった。

そもそも、
ネット上の顔の見えない人物の情報を信用するのもおかしな話だ。
たぶん普通の多くの方は、まともに相手にしないだろう。

だが彼の言葉を100%無視することはできなかった。
なぜなら彼の言ってることは、耳を塞ぎたくなるようなことだったけど、
受け入れざるを得ないような根拠もしっかりとあったからだ。

冷静に考えて、
サラリーマン、つまり会社に雇われて働くということは、
どんなホワイト企業であろうと、
朝の8時～9時には入社し、定時17時に上がったとしても、
一日に8時間以上の労働をすることになる。

実際は、定時に上がることはほとんどないと思うから、
実質の労働時間はもっと長くなる。

それが最低でも週5日は繰り返される。

さらに恐ろしいことに、
この労働生活は、定年するまで40年間続くのだ。

僕はこの現実を、
「まあ、そういうもんだからしょうがない」と受け入れていた。

だって働くってそういうことじゃないのか？
人生の大半の時間は会社に捧げることになるが、
そのかわりに僕はお金をもらうことができる。
それに、自分の仕事にやりがいがあれば、働くのは苦にならないさ。

とはいえだ・・・

ネットビジネスで彼のように月収100万円以上を稼ぎ出し、

さらに 365 日汗水たらして働かずに、毎日自分のやりたいことをして暮らせる。
そんな人間が現実中存在することは、僕の中で革命的だった。

世の中には 2 種類の間がある。
『雇う側の間』と『雇われる側の間』だ。

『雇う側の間』、つまり経営者は、
自らが、お金を稼ぐ『仕組み』を作ることになる。

例えば、おもちゃ屋さんを例に考えると、
おもちゃ屋さんは、子供たちにおもちゃを売れば売って、
儲けが出る。

経営者は、
このおもちゃが多く売れた分だけの利益を、すべて自分のものにできる。

つまりおもちゃを売る『仕組み』というものを作り、
この『仕組み』を大きくすることで、経営者の収入は無量大
なのだ。

それに対して、
『雇われる側の人間』、サラリーマンなどは、
この『仕組み』の中の一部でしかない。

どういうことかというと、
これもおもちゃ屋さんを例にしてみると、

『雇われる側の人間』 =
おもちゃ屋さんのレジ打ちをしている人、
お客の目を引くような広告を考える人、
新商品のおもちゃを開発する人、

などなど様々であるが、
要するに営業部、開発部、現場などこれらすべては、
経営者が作った『仕組み』という歯車を回す一部でしかない

のだ。

『仕組み』を回すために、時間と労働力を提供して、その対価として、サラリー（給料）を得ることができる。

しかし雇われる側の人間は、自らは『仕組み』を所有していないから、収入の上限は働いた分が限界。

会社の給料が月 30 万円だったら 30 万円、それ以上のお金を稼ぐことは、どうあがいても無理だ。

僕は、この真理をはじめて聞いた時、
「たしかに言ってることは間違っていないけど、経営者なんて誰でも簡単になれるわけじゃないだろう。それに経営者は赤字になったら人生詰むじゃん・・・」と考えた。

だが、ここで驚きの事実が発覚する。
ネットビジネスなら誰でもローリスクで経営者になることができる！

ネットビジネスというのは、
ブログ、YouTube、Twitter など、ネット上に自分のメディア
を作って、
自分の伝えたい情報、売りたい商品を紹介するものだ。

例えば、アフィリエイトというものなら、
自分のブログから、クレジットカードを申し込んでもらえれば、
その報酬として 5000 円くらいのお金がもらえる。

他にも、アマゾンや楽天の商品はすべてアフィリエイトすることができる。
自分のブログで好きな商品を紹介して、ブログのリンクから
商品を購入すれば、
その何%かを報酬としてもらえる。

つまりこれは・・

先ほど言った、経営者がやっていること、
お金を稼ぐ『仕組み』を所有することなのだ！

ネットビジネスの凄いところは、
これらがすべて、たった一人でもできるということだ。

ブログを作るのに、人を雇う必要はない。
実際ネットビジネスの世界では数多くの人が、
たった一人で、たった一台のパソコンで、
月収100万以上を稼ぎ出し、起業している。

また、経営するのにリスクはほぼ0といえる。
なぜなら、必要な経費はサーバー代くらいで、年間で数万円
もかからないだろう。

「失敗した」「成果が出ない」からといって、失うものは何
もないのだ。

僕は、このネットビジネスの世界に大きな可能性を感じた。
「月収 100 万、毎日遊んで暮らせる。
これはもう勝ち組の中の勝ち組じゃないか！！！！」

もはや僕の価値観は崩壊寸前だった。

これまで僕が勝ち組だと信じていた『エリートサラリーマン』
という人生は、
所詮『自分』という狭い世界の中で作られた価値観でしかなか
った。

僕の価値観を変えた、
この月収 500 万円をネットビジネスで稼ぐ人物、
僕はこの人の知識を盗もうと決めた。

YouTube、ブログ、メルマガを徹底的にフォローした。
それはもうストーカーのように・・

彼の発する情報は一言一句聞き漏らさず、
全てを自分の血肉とした。

そして、僕は最初に、
あるジャンルに絞ってサイトを作成した。

最初は本当にわかんないことだらけ。
「そもそもサイトって素人が作れるのか？」
「ドメイン？サーバー？なんじゃそりゃあ？」

まあそれでも何とかサイトを立ち上げた。

それでも、問題は次から次とやってくる。
「あれ、記事ってどうやって書けばいいの？」
「画像はどうやって挿入するんだよおおお」

もうね、最初はすべてが謎すぎる。

けど、やってくうちに慣れるのが面白いところ。(笑)

結局わかんないことは、調べれば答えが出てくる。
ちょっと Google で検索してやれば、今の時代、わからない
ことってそうそうない。

たしかに最初は時間がかかる。
でも、一つずつ問題を解決していけば、気づけばできるよう
になっていた。

実際、ウェブサイトやブログを作るっていうのは、
どんなパソコン音痴でも、1か月かからずにできると思う。

こんな感じで、
サイトを作ってから1か月後・・・

ポチポチっと管理画面を覗いてみると、
なんと僕のサイトから、1件成約が取れていた。

こうして僕は初めて、
インターネットビジネスで8000円という金額を稼いだのだ。

嬉しくて嬉しくてたまらずに、
そのとき深夜だったにも関わらず、とりあえず外に出て家の
まわりを徘徊した。(笑)

その後、僕は、
このサイトをもっと大きくすること、
そして他にももっと多くのお金を生み出す『仕組み』を作る
ことにした。

なぜ僕は成果を出すことができたのか。
それは『成功者の思考を徹底的にインストールしたから』に
他ならない。

僕は情報をかき集め、
成功者の思考法や考え方を徹底的に真似した。

- ・ 労働者ではなく経営者の思考を持つべし。
- ・ 稼ぐためには、素直に情報を聞き入れること。
- ・ すでに成功している人の真似をすること。
- ・ できないと考える前に、何事もまずはやってみること。
- ・ 自分の『無知』を自覚して、貪欲に学ぶこと。

何から何まで、成功者の思考と同じに近づくようにした。
「精神論なんて興味ねえ」と考えるより、
世の中で成功している人が見てる世界と
同じ世界をみることで、成功はぐんっと近づいた。

そもそも成功者の考え方になることができれば、
お金を稼げないなんてことは 100%あり得ない。

思考、マインドさえできてしまえば、
自然とそれに伴った行動をするからだ。

例えば、僕が具体的にやったことは、
「誰にでもできる作業は自分でやるな」という言葉から、
サイトを作る上で自分じゃなくても書けるような記事は、
すべて外注先のライターさんに書いてもらった。

ネットビジネスを始めて間もないド素人の僕が、
いきなり人を雇って、記事を書いてもらったのだ。

普通だったら、
「いやいやいや、いきなり人を雇うなんて無理だし（汗）」
と言って、
まだ早い、まずは慣れてからと後回しにするものだ。

だが僕は無理にやりにでも成功者の考え方を真似して、
「早いも遅いもないだろう。やってみないといつまでも成長
しない」と考えて、

ド素人ながら、いきなり外注を雇っている。

結局、最初に立ち上げたサイトは、
5人ものライターさんを雇い記事を増やしていった。

まだ自分がまともに記事を書くスキルすらないのに、
いきなり5人のライターさんに指示を出して、記事の添削を
するのだ。

例えるなら、サッカーの未経験者が、
いきなりサッカー教室のコーチをやるようなもの。

それでも僕はやった。
最初はどううまくいかないことばかりで、ハンパない不安に駆ら
れた。

ライターさんに書いてもらった記事を添削するのに、

「ここはこうしてください。この方がもっと良くなります。」
と、
自分なりに考えたことを音声にするという、添削動画を作っていたのだが、

最初はこのたった10分程度の添削動画を撮るのに、
3時間も4時間もかかった。

「あ、次しゃべる言葉が全然出てこない。はい、撮り直し。」
こんな感じだった。

本当にうまくいかなくて心が折れそうだったけど、
これまた不思議なことに、やっていくうちにどんどん慣れて
いった。

最初はどんなにハードルの高いことだって、
“とりあえずやりながら覚えていく”ことで、意外と簡単に
できたりする。

そして結果的に、
僕のサイトは圧倒的なスピードで成果を出すことができた。
自分一人でやっていたら、100%不可能なことだった。

このように成功者の思考を真似しまくったことで、
今は月収 100 万円の世界が、もう少し、手を伸ばせば
本当に手に入るんじゃないか。というところまできた。

しかも一度『仕組み』を作ってしまったので、
自動的にお金が入ってくる状態である。

現在は、ライターの数を中心に増やし、
10 名以上の人を雇って、いくつかのサイトを作ってもらっ
ている。

稼いだお金は、価値のある情報や商材に投資することで、
さらにお金を稼ぐ知識をどんどん吸収するという、
これ以上のない好循環となっている。

こうして僕は、
個人事業主として人を雇い、自分のビジネスを作っていくと
いう、
経営者の道に入りこんだ。

ビジネスをするのに才能や人脈なんてまったく必要なかったし、
本当に誰でもできると思った。

大事なのは、自分の今ある価値観をぶっ壊し、
新しい世界を受け入れる勇気を持つこと、ただそれだけだった。

昔の僕を思い出してみると、
なんとも実につまらない男だ。

自分は他人より優れていると信じ、
一流大学、大企業に入ることを考えていた。

とにかく『勝ち組になりたい』という気持ちは誰よりも強かった。

そんなプライドの塊みたいな人間だったけど、
過去に何度も自分の『弱さ』を自覚することもあった。

本当は弱い人間だったからこそ、
『勝ち組になりたい』という執着も大きかったのだろう。

しかし幸運にも、
これまで『勝ち組』だと信じていた人生だが、
本来、人生の選択肢はそれだけではない
ということを知ることができた。

僕が信じていた、
大企業のエリートサラリーマンという人生は、
経営者の『仕組みの一部』として、
毎朝、満員電車で揺られ通勤し、夜遅くまでクタクタになる
まで働く。

給料は自分の頑張りとは関係なく、会社に決められた分しか払われない。

30代40代になってようやく給料が上がるかもしれない。

これは僕が本当に望んでいた未来だろうか。

たとえ年収1000万円もらえても、時間的な自由は大きく制限されてしまう。。

それとは対極の世界が

ネットビジネスの世界には広がっていた。

自らがお金を稼ぐ『仕組み』を構築し、

『お金の自由』『時間の自由』この2つを手にすることができる。

毎日好きな時間に起きて、

パソコン一台あれば好きな時に好きな場所で仕事すりゃあいい。

別に仕事しなくたって、ネット上に『仕組み』があればお金は自動で入ってくる。

あとは、飽きるまで映画観賞したり、ふらっと旅に出て、温泉で癒されるのも自由だ。食事だって、異次元なくらい高級な肉を食べたり・・・

『お金』と『時間』が自由に使える人生、これはネットビジネスを知らなければめぐり合うことはできなかった。

成功することは決して難しいことではない。ただ『素直』になること。成功者の思考を真似することだ。自分の常識なんてぶっ壊しちまえばいい。そして一步一步目の前の壁を越えていけば、成功の道筋は見えてくる。

そんな世界を知ったからこそ、僕はこれまで積み上げてきた旧帝大の大学院というエリー

トコースを捨てた。

勝ち組だと思っていた就職という選択肢もまったく興味がなくなった。

今は毎日が刺激的で楽しすぎる。

日常をただぼんやりと過ごしていた時とは違って、新しく触れる情報、学ぶこと、すべてが新鮮だ。

学んだことをネットビジネスで実践して、それが収入に結び付く。

こうして自分が成長していることを確かに実感できる。

会社に就職したり、公務員として働くという道では、こんな生き方、まずできなかつただろう。

お金を得るためには、『汗水垂らして給料をもらう』ではない、

自分の努力次第で、お金を自由に稼ぐ方法があるのだ。

ネットビジネスに出会えたことで、
僕は常識だけにとらわれない生き方を知ることができた。

これまでの人生で積み上げた価値観だとか、
世間でいう常識なんていうものは、
ちっぽけな自分がこだわり続けてきた、まったくもって無意味なものだった。
常識なんてもんは糞くらえだ。

ネットビジネスなら
自分の望む自由を手にすることができる。
僕の求める世界は、ここにあった。

最後に、

ここまで読んでいただいた読者の方に心から感謝します。
こんな超長いレポートを最後まで読んでくれて本当に嬉しいです。

このレポートでは、
僕の正直な気持ちをありのまま書き記しました。

過去の思い出したくないような経験とか、
自分の弱さに向き合うのは、正直めちゃくちゃ辛かったです。

でも自分という人間を知る、いい機会にもなりました。

ここでも書いた通り、僕は本当に弱い人間だったけど、
ネットビジネスと出会って、素晴らしい世界を知ることが
できました。

自分をさらけ出すのは辛かったですが、
このレポートを読んだ方が、何か一つでも感じ取ってくれる
ことがあれば、
とても嬉しく思います。

昔の僕のように、人生に閉塞感を感じている方、
仕事やお金に関して多くの不安を抱えている方、
自分にたいして自信が持てない方がいれば、
僕のような生き方があることを知ってほしい。

自分の知らない世界に向き合ったから、今の自分があります。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
感想などいつでもお待ちしております。

レオ